

乾山燒色繪花唐草文水注



〔指定年月日〕平成四年一月二日
〔種別〕有形文化財（工芸品）
〔名称〕乾山燒色繪花唐草文水注
〔点数〕一口
〔所有者等〕妙法寺
〔所在地等〕堀ノ内三一四八―八

乾山焼色絵花唐草文水注

尾形乾山（深省、一六六三〜一七四三）は、京都の乾（西北）の方角の鳴滝の山中に窯を築き世にいう「乾山焼」を焼いた。

本水注は、総高二〇・五cm、口径八cm、高さ一三・一cm、胴幅一六cmで、右回転轆轤により成形しそれに把手を一体形成した上絵付陶器である。

把手・注口・蓋・胴部本体ともに精巧な形姿の一見磁器を思わす完好品で、胴部の赤絵の花文様はたつぷりと釉薬を含んだ練達の筆致で簡略化した「花唐草文」を描いている。把手と注口には、緑色釉地に赤絵の花文を散らし把手根元の五稜角文（星形）には染付を使い、蓋のつまみには赤絵菊花弁型を付けるなど、その絵付文様は細部に変化を見せている。

制作の時期は水注底部にある赤絵の「乾山」銘の旁が簡略されない書風であるところから、鳴滝窯時代（一六九九〜一七二二）であると推定される。

本水注は、当時好んで輸入された中国明代景德鎮窯呉須赤絵写の数少ない作例で、京焼及び江戸時代中期の陶芸を知る上できわめて貴重なものである。

【文化財所在地】

